

杉本彩絢（神奈川県横浜市）

タイトル「チーズケーキ」

ママはその時上の空だった。返答が宙ぶらりん。あっそ、娘の話よりテレビのニュースが大事ですか、そう態度で見せつけてリビングの戸を鋭く閉めた。扉の奥からは今日あった出来事を語る、キャスターの声。そしてそれに紛れ、オープンの音がした。ジジジと響くその音に、なぜだか凄くあったかさを感じ涙腺が緩んだ。チーズケーキの匂いがした。

朝の食卓に置かれたチーズケーキ。「どうそれ？いつもと違うの作ってみたんだ。」ママは微笑んで言った。笑顔のママと、悪の欠片もないような淡く純粋なチーズケーキ。だけどそれを頬張る私は清水のように冷たかった。ママの言葉に横にひよいと首を傾げると、一口で含み、歯を磨いて、足早に学校へ向かった。

帰宅すると小腹が空いていたので冷蔵庫の中のチーズケーキを食べた。そして徐にケータイを手に取り、センター問い合わせをする。一件。ママからだった。日付は昨日の夜一時。気付かないで私は寝たようだ。『今日はニュースに夢中でごめんね。今日チーズケーキ作ったよ。朝食べな。』朝の私が冷たく頭を反芻した。

日に日にチーズケーキは減ってゆく。あと二回分くらい。チーズケーキがなくなる前にママに謝らなくちゃ。無性にそう思ってならなくて、その日私はチーズケーキを食べなかった。一口しか残っていない淡いクリーム色は、私に食べれるはずがない。そうこう思っているうちに、いつの間にか忽然と、チーズケーキは冷蔵庫から姿を消した。古くなって捨てたのか、誰かが食べてしまったのか……。私はママに謝るきっかけを失い、チーズケーキの甘い味だけが、何度も何度も蘇った。

「ただいま。」ママが仕事から帰ってきて、私は小さな風に揺れる草のように本当に細やかに動揺した。「ねえ・・・チーズケーキってもうないの？」私の言葉は空気となじむように宙に浮いた。「ああ、一口ぐらいならあるよ確か。」私はとっさに顔を上げた。ママが冷蔵庫から出したそのチーズケーキは本当に一口で、冷蔵庫の奥の方から出てきた。それを受け取る時、私はチーズケーキのクリーム色に包まれて、チーズケーキと同じくらい純粋な気持ちになった。

「ごめんね。」

一口のチーズケーキは、一瞬で、私の中に溶けていった。